

リサイクルを化学し、持続可能な社会を支える

化学工業薬品の卸売業として創業した川瀬産業は、現在では産業系廃プラスチックのマテリアルリサイクルを主力事業とする環境企業へと成長した。マテリアルリサイクルとは、廃プラスチックを原料として再利用する手法であり、同社は全国から回収したポリエチレン（PE）やポリプロピレン（PP）などを洗浄・破碎・ペレット化し、新たな原料へと生まれ変わらせている。回収から再生製品の製造・販売までを一貫して手掛け、年間1万数千トンの循環利用を支えている。

同社の強みは、リサイクルが難しい薬品付着容器にも対応できる独自の処理技術だ。長年培った技術を生かし、高品質な再生原料や自社ブランド製品を生み出し、廃プラスチックの価値を高めてきた。

「もったいない」の精神を原点に、半世紀以上にわたり廃棄物を有用な資源へと転換し、循環型社会の実現に取り組んできた同社。その歩みと挑戦を追った。

創業の原点

現在、廃プラスチックのマテリアルリサイクル企業として知られる川瀬産業。その原点は、意外にも化学工業薬品の卸売業だった。

創業当初は塩酸や硫酸などの薬品を販売し、納品後に残る使用済み容器を回収・洗浄して再利用していた。この取り組みこそが、現在のリサイクル事業の原点である。

創業者の川瀬照雄氏は高校卒業後、薬品商社で約10年間勤務。その中で、廃酸や廃液を適切に処理する必要性を痛感していた。しかし、当時は環境保全への意識が低く、「そんな汚れた仕事はやめてくれ」と言われる時代だった。

それでも「誰かがやらなければならない仕事」という信念を貫き、1966年、退職金を元手に独立。工場を持たず、廃液の回収から事業をスタートさせた。

その後、公害問題への社会的関心が高まる中で、薬品容器の洗浄や排水処理設備を整備し、化学薬品を安全に扱う技術を蓄積。この経験が、後の廃プラスチックリサイクル事業へとつながり、1980年代後半から、本格的にリサイクル事業へ参入。当時すでに競合は多かったが、薬剤が付着した容器でも安全に洗浄・再資源化できる独自技術を武器に差別化を実現した。「回収→選別→破碎→洗浄→乾燥→異物除去→溶融押出→ペレット化」ま

で一貫して行う体制を構築し、化学メーカーや半導体メーカーなど、高い品質基準を求める企業から厚い信頼を獲得していった。



プラントの一部

技術が築いた強み

同社が創業以来こだわり続けてきたのは、廃プラスチックを焼却するのではなく、新たな原料として循環させる「マテリアルリサイクル」である。

焼却は短時間で処理できる一方、資源は失われ、CO₂も排出される。これに対し、マテリアルリサイクルは使用済みプラスチックを再び製品の原料として活用できるため、限りある資源を循環させることができる。「資源の多くを海外に依存する日本だからこそ、国内で資源を循環させることが重要」との考えのもと、同社は一貫して国内循環を重視した事業を展開してきた。

その価値が大きく評価される契機となったのが、2000年前後のダイオキシン対策を目的とした法

規制だった。企業が自社焼却炉を廃止・縮小する流れが進み、マテリアルリサイクルへの需要は急速に拡大する。

環境問題への関心がまだ高くなかった時代から技術を磨き続けてきた同社は、この社会変化を追い風に、本格的な成長期を迎えた。

危機が変えた経営

順調に成長していた同社にとって、2008年のリーマンショックは大きな試練だった。

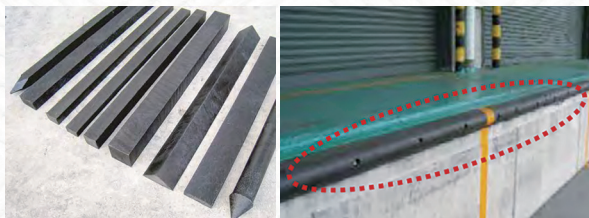
原油価格の急落により再生プラスチック価格も暴落し、取引停止が相次ぐ。大量の在庫を抱え、市場価格に左右されるビジネスの弱さを痛感した。

この経験から同社は二つの改革を進める。

一つは、販売先を特定業界へ依存しない体制づくり。もう一つは、再生原料を販売するだけでなく、自社で製品化まで手掛ける高付加価値ビジネスへの転換だった。その象徴が、100%再生プラスチックから生まれた自社ブランド「リプラギ®」である。

リプラギ®は木材代替製品として、物流資材や建築資材、エクステリア、自動車関連など幅広い用途で活用されている。一般的には品質安定のため新品樹脂を混ぜることも少くないが、同社は「資源を循環させる」という理念を守り、100%再生材での製品化に挑戦し続けている。

その品質は、大阪府循環型社会形成推進条例に基づく「大阪府認定リサイクル製品」に認定されるなど、高い評価を受けている。



リプラギ®製品（左）と建物保護への活用例（右）

未来へつなぐ循環

近年、同社は資源循環に加え、脱炭素経営にも力を入れている。2026年には、温室効果ガス削減

目標の国際認定である「SBT（Science Based Targets）」中小企業版に認定された。認定された企業はまだ少なく、環境経営への先進的な取り組みが評価されたものだ。CO₂排出量の見える化や鉄道貨物輸送の活用なども進め、循環型社会と脱炭素社会の実現を目指している。一方で、生産体制の強化も進む。三重県名張市で計画する新工場は、「地域経済牽引事業計画」の承認を受けるなど、地域産業への波及効果も期待されている。

工場見学の受け入れなどを通じて、子どもたちや地域社会へ資源循環の重要性を伝える活動も積極的に展開。「もったいない」という創業以来の精神は、単なる廃棄物処理ではなく、限りある資源を未来へつなぐ企業理念へと発展した。



工場見学

環境規制が追い風になる前から、焼却ではなく再資源化に取り組んできた。その半世紀にわたる積み重ねは、いま循環型社会と脱炭素社会を支える競争力へと変わっている。リサイクルはコストではなく、新たな価値を生み出す産業であり、同社の歩みはそのことを証明している。

（岡村俊幸）

会社概要



会社名：川瀬産業株式会社
所在地：大阪府貝塚市加神2丁目20-35
電話：072-436-1030
FAX：072-436-1035
創業：1966（昭和41）年
設立：1991（平成3）年11月
代表者：代表取締役 川瀬 幸久
資本金：1億円
社員：69名

事業内容：廃プラスチック回収・再資源化、再生プラスチック製品製造・販売、化学工業薬品・環境資材販売
URL：<https://www.eco-kawase.co.jp/>